



Title	調査報告 岩倉使節団が観た演劇：アメリカとイギリス
Author(s)	堤，春恵
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 197-214
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97459">https://doi.org/10.18910/97459</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 調査報告 岩倉使節団が観た演劇

—アメリカとイギリス—

堤 春恵

## はじめに

明治政府の演劇政策には、幕末から維新にかけて欧米各国に派遣された使節団の観劇体験が影響を与えたと言われている。実際、使節団は各地で劇場に招待され、観劇記録のような旅行記を残したメンバーもいる。<sup>(2)</sup> しかし演劇史研究の分野で、使節団が見た演劇についてのまとまつた研究は、松本伸子氏による『明治前期演劇論史』<sup>(3)</sup>、三原文氏による「第一回遣米使節とアメリカの舞台」<sup>(4)</sup>以外は見当たらないのが現状である。

明治政府の演劇政策への影響を問題にするなら、最も重要な使節団の一つは明治四年から六年（一八七一年から七三年）にかけて、欧米ではアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの十二カ国を回覧した岩倉使節団を置いてあらざるまい。メンバーは特命全権大使岩倉具視（右大臣）、副使木戸孝允（參議）、大久保利通（大蔵卿）、伊藤博文（工部大輔）をはじめとする現役の明治政府のリーダー達である。一等書記官の一

人福地源一郎はのちの劇作家、福地桜痴である。彼等のうちの多くは「文明開化」が国家的スローガンであった時代に、政治のみならず、西洋文化の移入の面でも大きな影響力を發揮している。また使節団には正規のメンバーの他に四十数名の官費、私費留学生が同行した。そのある者はアメリカに残って勉学し、一部は使節団のアメリカ滞在中にヨーロッパに渡つたので全行程を共にしているわけではないが、彼等の中にも中江兆民、金子堅太郎、牧野伸頸、田塚磨、津田梅子等、新しい日本のリーダーが含まれている。

岩倉使節団のメンバーが実際に各地で劇場に招かれた事は、久米邦武による報告書『特命全権大使米欧回覧實記』<sup>(5)</sup>（以下『実記』と表記）と、木戸孝允による日記<sup>(6)</sup>という公私二つの資料によつて明らかである。惜しむらくは久米、木戸の両人共に観劇体験の詳細を記録していない。久米は観劇自体にさほど興味を抱かなかつたようで、他のメンバーが劇場に招かれている間ホテルに籠つて『実記』の草稿を作る事もあつた。<sup>(7)</sup> 『実記』においても、工場をはじめとする施設の見学や重要人物との会見などの使節

団の行動や、行く先々の国々の歴史や文化についての記録は詳細、具体的であるのに比べ、観劇に関しては「劇場二招カル」といったそつけない記述が散見されるだけである。『木戸孝允日記』の記述も『実記』とほとんど変わらない。やはり言葉や風俗の問題から劇の内容を詳しく記録するに至らなかつたのだろう。その結果、岩倉使節団が観劇した芝居の題名や内容、観劇の状況は後世の読者には伝えられずに来た。

日本サイドでは書き残されなかつた岩倉使節団の観劇体験はむしろ、欧米のメディアによつて記録された。正規の団員だけでも四六名<sup>(8)</sup>、その上多くの随従者や留学生を引き連れた大使節

団は、海外各都市で注目の的だつたのである。行く先々の町の新聞は使節団の日程を克明に報じ、記事の最後にはメンバーが訪れた劇場、劇の題名が記されているのが常であつた。時としては劇評欄に、客席における使節団メンバーの言動が描写されている事もある。場合によつては劇場の広告欄に、使節団の来場が告知されている事さえある。『実記』、『木戸孝允日記』に記録されている使節団のアメリカ、イギリスでの観劇記録は二一件であるが、当時の現地の新聞を調査した結果、そのうち一二件の劇場、劇の題名を明らかにする事が出来た。日時は不明であるものの、特定の劇の観劇をほのめかす記事も存在する。

フランス以降の行程の記録は未調査であるが、アメリカ、イギリスを合わせると滞在日数は使節団の全行程の約半分を占め、英語圏の調査の記録として一つのまとまりを持つと考えられる

のでここに紹介する。

なお、日本では、明治五年一二月二日（一八七二年二月三日）まで旧暦が用いられ、その翌日からグレゴリオ暦に改められて明治六年（一八七三年）一月一日となつた。従つて岩倉使節団のアメリカ、イギリス滞在中の日付は、日本側の記録と現地側の記録の間にずれが生じる。本稿は現地での観劇の記録であるのでグレゴリオ暦を用い、必要に応じて日本側の日付を括弧に入れて付記する。

#### アメリカ

——一八七一年一月一五日から六月一七日まで——

一八七一年一二月二三日（明治四年一月一二日）に横浜を出港した使節団は一八七一年一月一五日にサンフランシスコに到着する。一行には、一時帰国するチャールズ・デロング（Charles DeLong）（一八三一～七六）駐日アメリカ公使夫妻が同行し、公使夫人が女子留学生の監督に当たつていた。デロンングに雇われた通訳ネイサン・エモリー・ライス（Nathan Emory Rice）<sup>(9)</sup>も使節団に同行している。当時のアメリカでは、一八六一年から一八六五年まで続いた南北戦争の終結後、アブラハム・リンカーナー大統領が暗殺され、アンドリュー・ジョンソンがあとを継いだが、北軍を勝利に導いたユリシーズ・シンプソン・グラント

將軍（一八二三～八五）がジョンソンを一八六八年の選挙で破り、大統領の座についていた。日本使節団のサンフランシスコ訪問は一八六〇年（万延元年）の遣米使節について二度目である。岩倉使節団の訪問は現地の新聞にも報じられ、市民的好奇心をかき立てていた。一行の中でも特に、髪を結った岩倉、着物姿の五人の開拓使派遣女子留学生が注目を浴びている。幕末から日本とのサンフランシスコ名譽領事を務めていたチャーレズ・オルコット・ブルックス（Charles Walcott Brooks）（一八三三～八五）は使節団を歓迎し、大使隨行員としてヨーロッパまで使節団に随行する事になつていた。<sup>(10)</sup> サンフランシスコでの使節団の観劇はかなりの程度、デロングとブルックスがイニシアティブを取つていたのではないかと思われる。

使節団の一行がはじめて劇場に招かれたのは一月十九日（明治四年一二月一〇日）である。<sup>(11)</sup> 当時のサンフランシスコは人口約一七〇〇〇〇人。大きな劇場は四つあり、一八六九年に建てられたカリフォルニア・シアター（California Theatre）はそのうちで最も新しく、設備のよい劇場であった。『実記』には「米公使の誘引にて」<sup>(12)</sup> とあり、新聞にはアクターマネージャーとして主役も演じたジョン・マッカラー（John McCullough）（一八三三～八五）に招待されたとある。<sup>(13)</sup> マッカラーはアイルランド生まれだがアメリカ東海岸で活躍し、カリフォルニアに来る前はエドワイン・フォーレストの一座で重要な役を演じていた俳優で、悲劇的な英雄の役を得意としていた。一八六六年から一八七七

年までの間はカルフォルニア・シアターの支配人だった。<sup>(14)</sup> 使節団のサンフランシスコ滞在を経済的に援助していたウイリアム・C・ラルストン（William C. Ralston）（一八二八～七五）は当時カリフォルニア銀行で頭取に次ぐ地位にあつたが、彼はこの劇場のパトロンでもあつたといふ。<sup>(15)</sup>

ここで上演された芝居は『赤と黒』（*Rouge et Noir*）という題名であるが、残念な事に台本は発見出来なかつた。幕開きは賭博場のシーンで、題名はそこから来ているらしい。新聞記事によれば、前半三幕は一八二九年のパリ、後半一幕はドイツの辺境が舞台となり、マッカラーゲ演じる主役モーリス・ダーベル（Maurice d'Arbel）が親友のふりをした悪漢によつて罪に落とされるが、最後にピロインのポーリーン（Pauline）と結ばれる波乱万丈のストーリーに、スリリングな賭博のシーン、殺人未遂、燃える小屋などの見せ場がめ込まれた、スペクタクルたっぷりの芝居であったようだ。<sup>(16)</sup>

支配人マッカラーゲ使節団を招待したのは恐らく、日本人への興味が恰好の売り上げに繋がると考へたからであろう。使節団の観劇が新聞に報道されたおかげで、使節団のメンバーは劇場に入るため二重三重に取り囲んだ見物人をかきわけねばならなかつた。新聞によれば下手ボックスの下の段いくつかも、同じサイドの前から三列がメンバーのために用意されたのである。出席者の数はかなり多かつたのだろう。岩倉は通訳ライス、公使デロングと共にボックス席に座を占め、隣のボックス

にはデロング夫人と一人の女子留学生、その隣には領事ブルックスが副使達と座っている。大使、副使等のボックスの後ろには日本国旗が飾られていた。<sup>(18)</sup> 使節団を見るための観客で劇場は大入りになったという。<sup>(19)</sup>

一月二八日（一一月一九日）<sup>(20)</sup>、木戸は通訳ライスの案内で観劇しているが詳細は不明である。

一月三一日（一一月二二日）、使節団一行は一八六九年に開通したばかりの大陸横断鉄道でサンフランシスコを離れ、夕方サクランメントに着いた。サクラメントはカリフォルニア州の州都で、当時の人口は一八〇〇〇人ほどであった。その晩一行はメトロポリタン・シアター（Metropolitan Theatre）に案内された。新聞には、カリフォルニア州知事アース（Booth）、米公使、その夫人、使節団メンバー（一人の女子留学生を含む）<sup>(21)</sup> がプロクター（Proctor）氏の招待により来場する事が記されている。<sup>(22)</sup> この時上演されたのは『青銅の馬、あるいは雲の王の魔法』（Bronze Horse or The Spell of the Cloud King）、『結婚した道楽者』（The Married Rake）<sup>(23)</sup>、『ポンペイ最後の日』（The Last Days of Pompeii）である。『青銅の馬』はイギリスの劇作家でありオペラのリブレットも書いたエドワード・フィッツゼボール（Edward Fitzball）（一七九二～一八七三）によつて書かれ、一八三五年にロンドンで初演された、中国を題材にした「オペラ風のスペクタクル」（operatic spectacle）である。<sup>(24)</sup> 『結婚した道楽者』は、チャールズ・セルビー（Charles Selby [George Henry Wilson]）（一八〇一～六三）によるファルスで一八三五年

に初演された作品だと思われるが、脚本は未見である。『ポンペイ最後の日』はブルワー・リットン（Bulwer-Lytton）による同名の小説の舞台化で、一八四〇年代にニューヨークで初演された。<sup>(25)</sup> メトロポリタン・シアターで上演されたのは火山の爆発と地震でポンペイの円形劇場が崩壊する最後のシーンである。

大陸横断鉄道で東を目指した使節団一行は大雪のため、二月四日から一八日間、ユタ州のソルトルーフ・シティで足止めを食う事になる。ソルトルーフ・シティは一八五〇年代にモルモン教徒によって拓かれた町で、当時の人口は一五〇〇〇人程であった。しかしこの辺境の町では演劇が盛んで、ロンドンのドルリー・レーン劇場をモデルに<sup>(26)</sup> 一八六一年に建設された堂々たる劇場が町の大通りに面してそびえ、デザート・ドラマティック・アンシェーション（Desert Dramatic Association）と呼ばれる常設劇団も組織されていた。この劇場を建てたのは当時まだ健在だったモルモン教の指導者ブリガム・ヤングその人であつた。彼は大変な芝居好きで自ら舞台を踏んだ経験もあり、劇団の女優のうち三人は彼自身の娘だった。<sup>(27)</sup> 劇場の内部は機能的であるが飾りつけはシンプルで、上演はモルモン教徒とその家族のためのものであつたようだ。<sup>(28)</sup>

二月六日（一二月二八日）、米公使デロング、夫人、領事ブルックス、二人の女子留学生を含む使節団のメンバー約四〇名はハブス・ポスター（Charles Hubbs Poster）（一八三三～九五）によつて書かれ、一八七〇年に

「ニューヨークで初演された『抜きつ抜かれつ、あるいは縛り首の繩』(Neck & Neck; or, The Hangman's Noose) を鑑賞した。<sup>(29)</sup> この脚題の台本は発見されていないが、演劇新聞『クリッパー』(Clipper [New York]) の記事で粗筋を知る事が出来る。<sup>(30)</sup> 主人公の

ウォルター・ウィルマース (Walter Willmarth) は銀行の出納係でオーナーの娘キャリー (Carrie) と婚約しているが、一幕で殺人の容疑をかけられ、危うく縛り首になるところを友人によって救われる。第二幕では、キャリーに横恋慕するデンマン (Dennman) が真犯人である事が電報によつてウォルターに知られる。デンマンは殺人の証人を乗つて汽車ごと消そうと企むがウォルターに阻まれる。第三幕でデンマンは絞首刑になり、ウォルターはキャリーと結ばれる。新聞の広告によれば、「絞首台での縛り首」のシーンと、「特急列車があわや木つ端微塵になる」シーンが呼び物であった。<sup>(31)</sup>

主役を演じたのはE・T・ステットソン (E. T. Sætson)、作者のフォスターと共に、ニューヨークのバワリー・シアターを本拠地とする俳優だった。『抜きつ抜かれつ』の一八七〇年の初演は大当たりし、スターになつたステットソンはこの作品を演じながらアメリカ各地を巡る事になる。興味深い事に、岩倉使節団のサンフランシスコ滞在中ステットソンもサンフランシスコの劇場に出演していた。おそらく同じ時期に東を目指し、やはり大雪のためソルトレーキ・シティへで足止めを食つていたものと思われる。

この日の公演は使節団歓迎のための特別公演で、劇場は日本両国の国旗で飾られていた。<sup>(32)</sup> 劇場の内部の様子を久米は「揚屋ノ設ケ頗ル広大ナリ、日本ヨリ輸入ノ挑灯 (チョウチン) ヲ挑 (カカ) ケテ享応ヲ示ス」と書きとめている。<sup>(33)</sup>

二月一〇日 (明治五年一月一日) 使節団一行は再び劇場に赴く。この日上演された『ピサロ』(Pizarro)<sup>(34)</sup> はドイツ人の劇作家アウェスト・フリードリッヒ・フェルディナン・フォン・コツエブ (August Friedrich Ferdinand von Kotzebue) (一七六一～一八一九) によつて書かれ、リチャード・プリンズリー・シリダーン (Richard Brinsley Sheridan) (一七五一～一八一六) によつてイギリスの舞台の為に翻案され、一七九九年に初演された作品である。一六世紀ペルーの戦士ローラ (Rolla) が、子供をかかえて橋を渡り、ピサロが率いるスペインの軍隊から逃れるシーンが作中の見せ場である。<sup>(35)</sup> 主役ローラを演じたのは『抜きつ抜かれつ』と同じステットソンであつた。<sup>(36)</sup> ブリガム・ヤングはかつてイリノイにいた頃、この役を舞台で演じた事がある。<sup>(37)</sup> ステットソンは恐らくこの事を知つていて、ヤングを喜ばせようとしたのではないだろうか。

二月一二日、使節団は再び汽車に乗り込んで東に向う。途中シカゴに一泊するが、シカゴは一八七一年一〇月の大炎の被害から回復していなかつた為、観劇どころではなかつたようだ。一行は二月二九日にワシントンに着く。

一八七一年のワシントンでは、ホワイト・ハウスに程近く位置す

るナショナル・シアター (National Theatre)<sup>(39)</sup> が、首都を訪れる内外のスター、ニューヨークのプロダクションの引越し公演に舞台を提供していた。一八三五年に建てられたこの劇場はその後何度も焼けては建て直されているが、使節団の訪問時の建物は一八五七年に再建されたものである。<sup>(40)</sup> 一九世紀前半を通じてナショナル・シアターのライバルであったフォード・シアター (Ford's Theatre) は、一八六五年リンカーン大統領暗殺の舞台になったあと閉場し、一八七一年には博物館として使われていた。

一八七二年三月四日、岩倉具視大使、大久保利通副使、伊藤

博文副使等はホワイト・ハウスにグラント大統領を訪問して国書を奉呈する。七十名の「東洋の客人」が超満員のナショナル・シアターの平土間の最前列 (front orchestra chairs) に陣取り、パ

レペ=ローザ・イハグリッシュ・オペラ・カンパニー (Parepa-Rosa English Opera Company) によるオペラ『ボヘミアの少女』(The Bohemian Girl)<sup>(41)</sup> を鑑賞したのはその二日後、三月六日（一月二七日）の事だった。<sup>(42)</sup> 『実記』には「場中二国及ビ米ノ国旗ヲ交叉シテ飾ル、別段ノ享應ナリ」とある。新聞にはオペラの宣伝と共に、使節団の劇場への来訪が予告されている。<sup>(43)</sup> 『ボヘミアの少女』はイギリスの作曲家マイケル・ウイリアム・バルフ (Michael William Balfe) (一八〇八～七〇) の作品で、アメリカでは一八四四年にニューヨークで初演された。ジプシーのもとで育てられたアーリーノ (Arlene) はボーランドの貴族タデウス (Thaddeus) と恋に落ち、田舎もタデウスを愛するジプシーの女

リーンを歌つた。

三月一一日に条約改正に関する第一回日の日米会談が行われ、そのうち二三日、一六日、一八日と会談が繰り返される。その過程で、使節団が持参した国書に全権委任の文面がない事が指摘され、副使大久保と伊藤は急遽帰国して必要な国書を持参する事になった。二人が日本から戻る七月二二日までの四ヶ月間、使節団はアメリカ東部に滞在し、観劇の機会に恵まれる事になる。

三月二七日（一月十九日）、使節団は同じくナショナル・シアターでオペラ『ミゲン』(Mignon)<sup>(44)</sup> を観てくる。この日は、スウェーデン出身の国際的なソプラノ、クリスティーネ・ニルソン (Christine Nilsson) (一八四三～一九二二) のアメリカツアーワンメントの初日であった。ジージ・バーナード・シヨーによつて「時代の最も才能あるソプラノ」と評されたニルソンは、ヨーロッパのみならずアメリカでも活躍した。ワシントンツアーの演目にはシャルル・

グノー (Charles Gounod) (一八一八～九二) のオペラ『ファウスト』(Faust) が含まれているが、ヒロインのマルゲリート (Marguerite) はニルソンの当たり役の一つで、一八六九年のパリにおける初演時に、一八八三年のニューヨークのメトロポリタン・オペラハウスのオープニングでもこの役を歌った。ワシントン初日の演目は『ランメルモールのルチア』(Lucia di Lammermoor) と発表されていたが、出演者の都合で直前にアンブロワーズ・トマ (Ambroise Thomas) (一八一九～九六) 作曲の『ミニヨン』(Mignon) と差し替えられた。<sup>(49)</sup> アリア「君よ知るや雨の国」で知られるこのオペラは、一八六六年にパリで初演された。ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の前半、学生ヴィルヘルム (Wilhelm)、女優フィリーヌ (Philine)、清純なジープシー娘ミニヨン (Mignon) の恋の三角関係をオペラ化したものである。舞台は一八世紀ドイツとイタリア。ドイツの田舎町で、旅芸人の一座の娘ミニヨンは自分を一座から引き取つてくれた学生、実はウイーンの貴族の息子ヴィルヘルムに思いを寄せる。ヴィルヘルムは女優フリーネを愛していたが、一行が滞在する貴族の邸宅で火事が起り、ヴィルヘルムは邸内に取り残されたミニヨンを救い出す。イタリアで二人が身を寄せた城の城主ロターリオ (Lothario) の行方不明の娘がミニヨンであることがわかり、ヴィルヘルムとミニヨンは結ばれる。<sup>(50)</sup>

ニルソンが国際的な大オペラ歌手である事は観劇した使節団メンバーにも伝えられらしい。木戸孝允は日記に、「子ルソ

ンなるもの当時世界一一の有名なる名調にて今夜も此場中あり會て彼華盛頓府に来て場を開く百日間に一日毎に千金を得ると云ふ」と書き付けている。<sup>(51)</sup> しかしながら多くの使節団メンバーにとっては、長大なオペラを言葉もわからぬまま鑑賞するのは重荷だったようだ。その様子をワシントンの新聞『イブニング・スター』(Evening Star [Washington]) の記者は次のように描写している。

オペラの上演中、ニルソンはただ一度の例外を除いては、観客が存在していることを全く意識していないようであった。その例外とは、彼女の歌声が日本から来た使節達の野蛮な心を癒し、眠らせてしまった時である。この光景は、注意深い芸術家の目を逃れるにはあまりにも可笑しかつたのであろう。ニルソンが明らかに面白がつている様子がわかつた。<sup>(52)</sup>

岩倉使節団のメンバーはワシントンでオペラを二回鑑賞しているが、その事実は『実記』の記録からも、『木戸孝允日記』の記述からも浮かび上って来ない。久米の観劇記録は「劇場二招ガル」、木戸の場合は「戯場に至る」と書かれるのが普通であり、ジャンルにまでは言及されていないからである。『実記』の中で「オペラ」というジャンルを意識した表現が出て来るのはフランスに渡つてから一八七三年一月一日の記事で、「『オペ

ラ」堂ヲ以ツテ議院トナシタリ」とあるのが始めである。<sup>(53)</sup> 又同年三月一日ベルリンでの記事には、「夜、皇帝ノ劇場ニ赴ク(是ヲ『オペラ』ト云、諸種芝居中ニテ最上等ナルモノ猶我猿樂ノ如シ)。」

とある。久米邦武は明治の能楽復興運動に尽力した一人として知られ、岩倉使節団の一員としてのオペラ体験との関係について論じた論考もあるが、使節団とオペラとの出会いが「実記」の記述からのみではうかがい知れない事を指摘しておきたい。

【実記】四月六日(二月二九日)の項には「夜「ベールト」の演劇に赴ク」とある。しかし当時のワシントンには「ベールト」という名前の劇場は見当たらず、演劇の名称としても「ベールト」が何を意味するかは定かではない。【木戸日記】の同じ日には、午後、林董等数人のメンバーと共に「曲馬に至り」「異獸異鳥」と、おそらく奇形と思われる人間を見、夜は「モロ」の案内にて戯場に至る」とある。木戸達が午後に訪れたのは六番街の空地で興行していた『アダム・フォーポーの巨大な見世物、博物館、キャラバン、鳥小屋』(Adam Forepaugh's Gigantic Menagerie, Museum, Caravans, Aviary) であったようだ。<sup>(54)</sup> ナショナル・サーカスはマネージャーのアダム・フォーポー(Adam Forepaugh)(一八三一~九〇)の名を冠したいくつかの名で呼ばれているが、一八六七年に創設され、当時のアメリカでは三本の指に入るサーカス団だった。<sup>(55)</sup>

一方夜の観劇には大使を始め十数名が同行している。この日は土曜日で、ナショナル・シアターはマチネーのみの公演であつたと思われるので、【実記】に記された「ベールト」の演劇も、木戸、岩倉が赴いた劇場もナショナル・シアターではあり得ず、観劇の内容は不明である。

【木戸日記】の四月二九日(二月二九日)に「大使始フルックス之案内にて戯場に至る」とあるが、【実記】には観劇の記述はない。木戸とブルックスの行き先がもしナショナル・シアターであれば、彼らが観劇したのはこの日初日を開けたマドモワゼル・マリー・ヒーム・オペラ・ブッファの女王。(Mlle MARIE AIMEE "The Queen of Opera Bouffe") 主演の、ジャック・オットフェンバッハ(Jacques Offenbach)(一八一九~八〇)作曲による『ジエロルスタン女大公殿下』(La Grande-Duchesse de Gérolstein)であるようだ。<sup>(56)</sup>

【実記】には五月六日(四月一日)、「夜劇ラミル」とある。<sup>(57)</sup> 【木戸孝允日記】五月十日(四月五日)には「夜ブルックス之案内にて戯場に至る」とある。<sup>(58)</sup> ワシントンにおいて使節団員が訪れた劇場は、ナショナル・シアターが圧倒的に多い事を考へると、久米と木戸は五月六日に初日を開けた『ブラック・クロック(Black Crook)<sup>(59)</sup>』を行った可能性が大きい。また日時は不明だが、大使岩倉も『ブラック・クロック』を観劇してゐると思われる。チャールズ・M・バラス(Charles M. Barras)(一八一六~七三)によつて書かれ、一八六六年にニューヨークで初演されたこの劇はブロードウェイで一年以上のロングランを達成した最初の作品として知られる。<sup>(60)</sup> 豪華な舞台装置、豊富な歌と踊り

に彩られた舞台は、ミュージカルの元祖とも言われている。シノプシスは以下の通りである。

舞台は一六〇〇年のドイツの山の中である。ブラック・クルックと呼ばれる魔術師ハーツォグ (Hertzog) は寿命を延ばすために悪魔と契約を結び、毎年一人の人間の魂を悪魔に差し出そうとしている。画家のローデルフ (Rudolf) は恋人のアミーナ (Amma) を恋敵の伯爵ウォルフェンスタイル (Wolfenstein) に奪われ、自分は伯爵の城の地下牢に閉じ込められていた。ハーツォグはローデルフの魂を奪うため、彼を牢から救い出して黄金の洞窟に送り届けると申し出、ローデルフはアミーナを救うためにハーツォグの誘いに乗る。ローデルフが旅の途中で命を助けた鳩は、実は黄金の洞窟に住む妖精の女王ストラクタ (Stalacta) だつた。ストラクタと妖精達の助けを借りてローデルフは伯爵を倒してアミーナと結ばれる。悪魔との約束を果たせなかつたハーツォグは滅びる。

女王が住む黄金の洞窟が一瞬のうちに妖精の世界へと変わるシーン、この場に登場する、ピンクのタイツを穿いた百人のバレリーナはこの作品の呼び物の一つであった。『日本外交文書』にまとめられた使節団関係の記録によれば、五月一六日、使節団のメンバーはケイトと名乗る女優から観劇に招待された。<sup>(65)</sup> 前後の事情から考えて、このケイトは『ブラック・クルック』で女王ストラクタに扮していたケイト・サントリー (Kate Santley) (<sup>(66)</sup>) であつたと思われる。彼女はアメリカ生ま

れであるがイギリスでデビューし、一八七〇年代にはアメリカに戻つてプロードウエイで活躍していた。この女優が何故使節団メンバーを彼女の出演する『ブラック・クルック』の公演に招いたかは、五月二七日になつてワシントンの新聞『デイリー・モニング・クロニクル』(Daily Morning Chronicle [Washington]) に現れた記事から推察されよ。

ワシントンを離れる直前、ミス・ケイト・サントリーは、岩倉に請われて彼にお目通りした。通訳を介して岩倉は、彼女に会えて大嬉しく、「彼女の事は、輝く瞳の女王としてこれからも長く記憶するでしょう」と述べた。その後彼は彼女に、日本の扇子や品物、ハンカチを入れる箱、水晶、それに宝石類と言つた美しく高価な贈り物をした。事実、大使の振る舞いは恋に落ちた紳士のそれであつた。<sup>(67)</sup>

六月五日（四月三〇日）、木戸を含む使節団メンバーは、ナショナル・シアターで日本人の軽業を觀る事になる。<sup>(68)</sup> 日本人の軽業師のグループは、明治維新の直前から次々と海外に進出し、歐米各地にその足跡を残している。<sup>(69)</sup> この時ワシントンで公演を行つていたのはロイヤル・エド・ジャップス (Royal Yeddo Japs) と名乗る一座であつた。一座のリーダー、「Professor Gangero」は、一八七一年、一三人の座員と共に日本を離れた早川源次郎である。<sup>(70)</sup> 源次郎の演技は伝統的な軽業芸、肩の上に竹竿を立て、

竹竿の上で少年が芸を演じる間三昧線を弾きながらバランスを取り曲芸であったよ<sup>(72)</sup>だ。「Sunkechi」と呼ばれる芸人は、何本かの刀を刃を上にして並べた梯子の上を裸足で歩いてみせた。一座には「Belle of Japan」と呼ばれる綱渡り芸人もいた。<sup>(73)</sup>使節団が観劇した田の上の芸人の演技を、『モーニング・クロニクル』(Morning Chronicle [Washington]) の記者は次のように告へてゐる。

——今日の午後のマチネード、「Bell of Japan」は二階棧敷(gallery)から舞台へと張った一本のロープの上を、ロープの支え綱もなく、バランスを取るために棒も持たずに歩くだらう。<sup>(74)</sup>

なお、『木戸日記』によれば使節団の観劇はマチネーではなく、夜の公演だつた。<sup>(75)</sup>

ワシントンにおける日本の軽業の一座との出会いを、久米は次のように回想している。「此の比軽業の一組華府に来て其の一人が女装した儘大道を歩行するに行き逢つたが、市民は『娘さん』といふて、我等と『一視同仁』にしたのには閉口した。(中略)ついで大劇場に請待され、日本軽業を見たが、平凡の綱渡芸で、彼の『娘さん』が白粉を塗り立て、毛脚に縦模様の裾を曳いて芸を演じたのには一行の手に汗を握らせた」。マリーン・メイヨ (Marlene Mayo) 氏は「The Western Education of Kume

Kunitake, 1871-6] の中で、ルシルソードについて、軽業師が日本の浴衣を着て大通りを歩いたので女性と間違えられ、同じ日本人の使節団員も「娘さん」と呼びかけられたと解釈している。しかし恩玉実英によれば、一九世紀の日本の軽業では、男性が女装して綱渡りをする芸が見られた。<sup>(76)</sup>「Bell of Japan」も女装した綱渡り芸人であり、おそらく宣伝のために舞台衣装を着けてワシントンの田抜き通りをパレードしたのではないか。「Bell of Japan」を日本語で「娘さん」と称したので、ワシントン市民は同じ日本人の使節団メンバーにもそう呼びかけたのだろ<sup>(77)</sup>う。

六月九日、大使一行はアメリカ政府の招待で北部巡遊に出発する。翌一〇日(五月五日)ニューオーリンズに到着し、その夜八時より、「アロトウエー」へ劇場<sup>(78)</sup>招かれている。木戸の日記によれば、彼等が観劇したのは一種のアクロバットであったようだ。木戸は「八字より又戯場に至る一人銅線を渡るを見る其芸実に妙彼曾てナヒガラ海上銅線を張り其上を渡りし」と云依て其節の新聞に世界第一の名を得んと生國は仮なりと云<sup>(79)</sup>と書き残している。<sup>(80)</sup>ニューヨークでの観劇の内容については「実記」でも言及されている。使節団は六月一四日にナイアガラの滝を見学した。久米はその時の記録の中で「——往年歐州ノ軽業師、拿破倫(ナボレオン)トカ呼ル、大胆無敵ノ術ニ得タルモノ、此峠ニ綱渡リヲナセシコトアリ、其軽業師ハ、今モ現在シ、後新約克府(ニューヨーク)ニテ綱渡ヲナシタルヲミタリ」と書い

ている<sup>(82)</sup>。フランス人の軽業師ブロンディン (Blondin) は一八五九年にナイアガラの滝の上に張り渡したロープを渡つて評判を呼び、その後ヨーロッパ、アメリカで綱渡りの曲芸を演じた。木戸と久米の記述はどちらも、使節団のメンバーがニユーヨークの劇場でブロンディンの綱渡りを観た事を示唆している。

しかしながら一八七一年六月一〇日にブロンディンがニューヨークの劇場に出演したという記録は見当たらず、使節団のメンバーが訪れた劇場の名前も定かではない。

六月一一日にニューヨークを発つた使節団のメンバーは、ウエスト・ポイント、ナイアガラ、サラトガ、スプリングスに立ち寄り、六月一七日にボストンに到着する。翌一八日（五月一三日）と一九日（一四日）、南北戦争終結十周年記念音楽祭に出席した。<sup>(83)</sup>『実記』の中でこの音楽祭の記録は、舞台芸術についての唯一のまとまった記述であるが、音楽史の分野で詳しい論考がなされているのでそれに譲りたい。

一八日の夜一行はグローブ・シアター (Globe Theatre) ドラマ<sup>(84)</sup>ジ・L・フォックス (George L. Fox) (一八一五～七七) によるパントマイム、『ハンプティ・ダンプティ』 (Humpty Dumpty) を観劇している。このパントマイムはフォックスによつて一八六八年に創められた。三原文氏によれば、「英國の伝統劇パントマイムと、イタリア起源のコメディア・デッラルテ（がフランスに渡つたあとのもの）を融合させた独自の道化喜劇的なスタイル」である。フォックスが演じたハンプティ・ダンプティ

は台詞や歌を排除し、「卵のような白塗りの禿げ頭で派手な衣装に身を包み、ひたすら表情と仕草で勝負するという変幻自在な役柄」<sup>(85)</sup>であった。ボストンでも、フォックスの演技や、衣裳や舞台の華やかさが新聞の劇評で賞賛され、客席の反応も上々だったようだ。

使節団は六月一〇日にボストンを離れ、ワシントンへ向う。七月二二日に大久保、伊藤両副使が帰着し、ただちに条約改正の会談を行うが決裂し、使節団はアメリカを離れ、ヨーロッパに向う決断を下した。その後ニューヨークを経て再びボストンに至り、八月六日にボストンの港からイギリスに向うまで、使節団メンバーの観劇の記録は見当たらない。

#### イギリス

——一八七一年八月一七日から一一月一六日まで——

使節団は八月一七日、リヴァプール経由でロンドンに入る。政府によつて任命された接待掛ジョージ・ガードナー・アレクサンダー (George Gardiner Alexander) (一八二一～九七)、帰英中のイギリス駐日公使ハリー・スマス・パークス (Harry Smith Parks) (一八二八～八五)、公使書記官（通訳）ウイリアム・ジョン・アストン (William George Aston) (一八四一～一九一一) が使節団を案内した。九月一六日（八月一四日）、木戸は当時イギリス

に留学していた甥で養子の正二郎<sup>(88)</sup>と共に芝居を観てゐるが、詳細はわからない<sup>(89)</sup>。この時期、ヴィクトリア女王はスコットラン<sup>(90)</sup>に避暑に赴いていた。女王の還幸を待つ間、一行のうち岩倉、木戸、大久保、伊藤等は、九月二十九日ロンドンを発ち、アレクサンダー、パークス、アストンに案内されてイギリス北部へと向つた。

一行が最初に訪問したりヴァプールは北西部の大都市の一つで、世界に開かれた港町である。使節団が訪れた頃には、ロンドンに次いでイギリス第二の都市と言われていた。一行は一〇月一日（八月二十九日）に、アレクサン德拉・シアター（Alexandra Theatre）で『コリンントのメディア』（*Medea in Corinth*）を観劇した。この作品はイギリスの劇作家W・G・ウィルズ（W.G.Wills）（一八二八～九一）による悲劇で、脚本は未見であるが、新聞の劇評によればギリシャ神話のイアソンとメディアの物語を基にした劇であり、メディアに扮した主演女優ミス・ベイトマ<sup>(91)</sup>（Miss Bateman）の演技が高く評価されている<sup>(92)</sup>。この観劇は市長に案内された公式な訪問であり、劇場の財務担当者（treasurer）が使節団を入口で迎え、ドレスサークルの一列目に案内した。付属オーケストラが（日本の）国歌を演奏して使節団を熱烈に歓迎したという<sup>(93)</sup>。終演後、一行は舞台裏を見学した<sup>(94)</sup>。

一〇月二日（八月三十日）には「馬芝居」<sup>(95)</sup>、木戸によれば「馬戯場」に行つてゐる<sup>(96)</sup>。この時も市長の案内によるものだった<sup>(97)</sup>。サークスだと思われるが詳細は不明である。

一〇月四日（九月一日）一行はマンチエスターに移動した。マンチエスターは毛織物工業で盛え、リヴァプールと共に北西部の大都市の一つである。この日本戸孝允と何人かのメンバーは、市長に案内され、シアター・ロイヤル（Theatre Royal）<sup>(98)</sup>、ロバートソンとヘイマー・ケット・カンパニー（Miss Robertson and the Haymarket Company）による『恋の追跡』（*The Love Chase*）<sup>(99)</sup>を観劇している<sup>(100)</sup>。シアター・ロイヤルは一八〇七年に開場した歴史ある劇場であるが、一八四年に焼けて建て直されている。『恋の追跡』は、三組の男女の恋が入り乱れ、終幕で思い違いや離別されていたアイデンティティーがすべて現れて三組の結婚式に至る喜劇である。ジェイムズ・シリダーン・ノウルズ（James Sheridan Knowles）（一七八四～一八六一）によつて書かれ、一八三七年に初演された<sup>(101)</sup>。久米が一人ホテルに残つたといへ回想録の記事はこの時の事であろう<sup>(102)</sup>。

同じくマンチエスターで、一〇月七日、使節団はプリンス・シアター（Prince's Theatre）における『ヘンリー五世』（Henry V）の上演に招かれる。『実記』には「使節ノ為メ、別段の演劇ニテ、赤白ノ絹二、番附ヲ印刷シテ、一統ニ配布シ、場内ニ両國ノ国旗ヲ交叉シ、其設ケ甚タ盛ナリ」とある<sup>(103)</sup>。一八六一年に建てられたプリンス・シアターは、豪華に飾られたプロセニアル・アーチ、平土間を馬蹄形に取り巻く二層のボックス席を備え、一八五八年に建てられたコヴェント・ガーデン劇場の内部によ似た典型的なヴィクトリア朝風の豪華な劇場だった<sup>(104)</sup>。『ヘン

リーエンリー五世」は劇場のマネージャーでもあった俳優チャールズ・カルバート (Charles Calvert) (一八二八～七九) の主演だった。

マンチエスターにおけるカルバートのシェイクスピア上演は一八五九年、シアター・ロイヤルでの「ハムレット」に始まる。

一八六四年にカルバートがプリンス・シアターのマネージャーとなると同劇場で毎年のようにシェイクスピアを上演するようになり、「ヘンリー五世」はその九番目の演目である。<sup>(四)</sup>このプロダクションは一八七五年にニューヨークのブース・シアター (Booth's Theatre) に引越し公演をしているが、カルバートは健康を損ねていたため、主役へヘンリー五世を演じる事は出来なかつた<sup>(四)</sup>。

マイケル・ブース (Michael Booth) によれば、カルバートによるシェイクスピア上演は、ロンドンの演劇と比較しても高い

水準に達し、ヴィクトリア朝中期（一八五〇年代から七〇年代）の地方都市における質の良いプロダクションの好例と言えるものであつた<sup>(四)</sup>。カルバートの『ヘンリー五世』はチャールズ・キーン (Charles Kean) (一八一～六八) に倣つて歴史的に正確な舞台装置や衣装を用いた。それだけではなく、これもキンに倣い、シェイクスピアの原作では五幕のはじめにコーラスによる五行の台詞で描写されているだけの、アジンコートの戦いでフランスに勝利したヘンリー五世がロンドンに入場するシーンを「歴史的エピソード」と称して舞台で再現した。よろいを輝かせ、軍旗をはためかせて行進するイギリス軍を率い、馬に跨つてい

よいよロンドン橋のたもとに差し掛かつたヘンリー五世、ロンドン市民、職人、若者、娘達等が道を埋め尽くして迎える」のシーンは、カルバートの友人で、このプロダクションの時代考証を担当したアルフレッド・ダービーシヤ (Alfred Darbyshire) によれば二〇〇人から三〇〇人の人間を舞台に乗せる大掛かりなものであつたという。彼は「あの場面を実際見た者はそれを忘れるとはないだろう<sup>(四)</sup>。」と書き残している。

使節団の一員林董は、後にマンチエスターでの観劇の様子を「同使節マンチエスター市に滞在の一夕、市長は歓待のために使節を芝居に招いた。連中が多勢であつたから、東西の棧敷を取つて二組に分つて、東の一組には市長の夫人と令嬢とが亭主役となり、西の一組には市長と書記官が亭主役となつたが（後略）」と回想している。<sup>(四)</sup>劇そのものについての記述がないのが残念だが、「恋の追跡」もしくは「ヘンリー五世」の観劇の折の観客席の有様が伺える。

一〇月九日、使節団はマンチエスターからグラスゴーに向つた。一行は一〇月一二日にエディンバラを基点にスコットランドを巡り、その後ニューカッスル、ブラッドフォード、シェフィールド、バーミンガムなどを巡り、一一月一一日に再びロンドンに帰りつく。ヴィクトリア女王への謁見は一二月五日である。一行がフランスに向けてイギリスを離れたのは一二月一六日だつた。マンチエスター以後使節団の観劇の記録は見出せない。

## おわりに

岩倉使節団は、一九世紀の新しい交通手段である蒸気船と蒸氣機関車を駆使して世界を巡った。それと同じ時期に、やはり汽船や汽車に乗って世界を駆け巡っている人々がいた。俳優達である。その中にはスペクタクルを売り物にした大衆演劇のスターも、国際的なオペラ歌手も、日本の軽業の芸人も、世界最初のミュージカル女優も、独創的なパントマイムで一時代を画した道化師も含まれている。使節団の行程と、俳優達の巡る道筋は、使節団が訪れる数々の都市で網目のように交差していた。

マンチエスターでヘンリー五世を演じたチャーレズ・カルバーとの出会いのよう、時を越えて、明治維新の年に世を去ったチャーレズ・キーンと間接的に交差している例もある。欧洲のメディアからは使節団側のリアクションをほとんど知りえないのが残念だが、これらの資料を手がかりに、岩倉使節団のアメリカ、イギリスにおける観劇体験の、明治演劇への具体的な影響の可能性について考察して行きたい。

## 〈付記〉

本稿を書く過程で、〔〔原文氏によ多くの〕教示を賜りました〕とに感謝申し上げます。

## 注

- (1) 大笠吉雄『日本現代演劇史』白水社、一九八五年、三〇〇頁。
- (2) 市川清流（渡）「尾鷲欧行漫録」【遣外使節日記纂輯・1】東京大学出版会、一九七一年。
- (3) 松本伸子『明治前期演劇論史』演劇出版社、一九七四年。
- (4) 三原文「第一回遣米使節とアメリカの舞台」「英語青年」第146巻第五号、1900年、二八六～一八七頁。
- (5) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』講談社、一九七七～一九七八年。
- (6) 木戸孝允『木戸孝允日記』第一巻、日本史籍協会、一九二三年。
- (7) 久米邦武『久米博士九十年回顧録・上』早稲田大学出版会、一九三九年、三一一頁。
- (8) 田中彰『岩倉使節団米欧回覧実記』岩波書店、1901年、一一一頁。
- (9) チャーレズ・A・ロングフェロー『ロングフェロー日本滞在記』山田久美子訳 平凡社、1904年、五八～五九頁。
- (10) 宮永孝『アメリカの岩倉使節団』筑摩書房、一九九一年、一一七頁。
- (11) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一巻、八三頁。
- (12) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一巻、八一頁。
- (13) "Amusements, etc." *Daily Alta California* [San Francisco] 17 vols. Japan Documents, 2002. Vol.I, XXIX. ジャパン・ドキュメント・ライ

- Jan. 1872.
- (14) Culliton, Joseph. "John McCullough" \_The Life & Times of Joseph Haworth\_ 2000. The Life & Times of Joseph Haworth. 29 Sept. 2009 <[http://www.josephhaworth.com/john\\_mccullough.htm](http://www.josephhaworth.com/john_mccullough.htm)>
- (15) „レーヴィー・ド・トマス・ヘイ (Sidney D. Brown) 「トマス・カーサーの米使節団」『米欧回観記』の翻訳と序文』北洋漁業大学図書室  
レーヴィー・ド・トマス・ヘイ 1911年。
- (16) Kume, Kunitake. *The Iwakura Embassy, 1871 – 1873* Vol.178.
- (17) "Amusements." *San Francisco Chronicle* 16 Jan. 1872: "Amusements etc." *Daily Alta California*[San Francisco] 16 Jan. 1872.
- (18) *San Francisco Chronicle* 18 Jan. 1872.
- (19) *San Francisco Chronicle* 19 Jan. 1872.
- (20) 木口善丸、前掲書、119頁。だが木口は田代更級線で田舎の田舎を変へなかつたるゝの記事の田舎は110頁。
- (21) ハロウタービルズ・ベックルズ・セントラル・アーティスツ。
- (22) "Local Matters" *Sacramento Bee* 31 Jan. 1872.
- (23) "Local Matters." *Sacramento Bee* 4 Feb. 1872.
- (24) Fitzball, Edward. *The Bronze Horse, or, The Spell of the Cloud King: An Operatic Spectacle in Two Acts.* [microform] Edition: Duncombe's ed. London: J. Duncombe, c1830.
- (25) Medina, L. H. *The Last Days of Pompeii: A Dramatic Spectacle.* [microform] New York: French, c1850.
- (26) Hartnoll, Phyllis. *A Concise History of the Theatre*. London: Thames and Hudson, 1968.199.
- (27) Hoyt, Harlowe Randall. *Town Hall Tonight*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice, 1955.5.
- (28) Witham, Barry, ed. *Theatre in the United States: A Documentary History*. Vol.I. Cambridge: Cambridge UP, 1996. 148.
- (29) "The Japanese Levee" *Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (30) Brown, T. Allston. "The Great Sensation Piece of the Day, 'Neck and Neck.,' " *Clipper* [New York] 25 Mar. 1871. 3.
- (31) "Theatre." *The Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (32) "The Japanese Levee." *Salt Lake Daily Herald* 7 Feb. 1872.
- (33) 久米邦武『特命全權大使米欧回観記』第1編 1911年。
- (34) 田代更級。
- (35) Sheridan, Richard Brinsley *Pizarro*. Whitefish: Kessinger Publishing, 2004.
- (36) Bogard, Travis, Richard Moody, and Walter J. Meserve, eds. *American Drama*. London: Methuen, 1977. Vol.8 of *The Revels History of Drama in English*. 8 vols. 1976-1983.188.
- (37) "Amusements." *Salt Lake Daily Herald* 10 Feb. 1872.
- (38) Hartnoll, Phyllis. *A Concise History of the Theatre*. London: Thames and Hudson, 1968.199.
- (39) 新羅王抄『新羅王抄』New National Theatre 1982.11.15-1983.1.10。
- (40) Bordman, Gerald Martin. *The Concise Oxford Companion to American Theatre*. New York: Oxford UP, 1987.499.

- (41) Balfe, M. W. *The Bohemian Girl*. The Decca Record Company Limited. 1991.
- (42) "Amusements." *Davy Morning Chronicle* [Washington] 7 Mar. 1872.
- (43) 久米邦武『特命全権大使米臨回観美品』第1巻 110枚。
- (44) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 6 Mar. 1872.
- (45) Bordman, Gerald Martin. *American Musical Theatre: A Chronicle*. 3rd ed. Oxford: Oxford UP, 2001.15; Dizikes, John. *Opera in America: A Cultural History*. New Haven: Yale UP, 1993. 95.
- (46) Dizikes, John. *Opera in America: A Cultural History*. New Haven: Yale UP, 1993.114.
- (47) Thomas, Ambroise. *Mignon* CBS Masterworks. 1978.
- (48) LaRue, C. Steven, ed. *International Dictionary of Opera*. Vol.I. Detroit: St. James, 1993. 2 vols. 936.
- (49) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 28 Mar. 1872.
- (50) LaRue, C. Steven, ed. *International Dictionary of Opera*. Vol.I. Detroit: St. James, 1993. 2 vols. 873.
- (51) 木皿掛軸 前掲書 1枚○～1枚 1面。
- (52) "The Opera." *Evening Star* [Washington] 28 Mar. 1872.
- (53) 久米邦武「特命全権大使米臨回観美品」第1巻 1枚○～1枚。
- (54) 同上 1枚○～1枚。
- (55) 竹本裕一「久米邦武と能樂復興」『幕末明治期の国民国家形成の文化変容』新曜社、一九九五年。
- (56) 久米邦武「特命全権大使米臨回観美品」第1巻 1117枚。
- (57) 木皿掛軸 前掲書 1枚○～1枚 1面。
- (58) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 2 Apr. 1872.
- (59) Hoh, LaVahn. "Circus: Adam Forepaugh Circus 1867 - 1894" The Circus in America: 1793 - 1940. 2004. University of Virginia. 6th November 2009 <[http://www.circusinamerica.org/public/corporate\\_bodies/public\\_show/4](http://www.circusinamerica.org/public/corporate_bodies/public_show/4)>
- (60) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 2 Apr. 1872.
- (61) 木皿掛軸 前掲書 1枚○～1枚 1面。
- (62) "Amusements." *Evening Star* [Washington] 29 Apr. 1872.
- (63) 久米邦武『特命全権大使米臨回観美品』第1巻 1115枚。
- (64) 木皿掛軸 前掲書 1枚○～1枚 1面。
- (65) Barras, Charles M. "The Black Crook: An Original and Spectacular Drama in Four Acts." *Nineteenth Century American Plays*. Ed. Myron Matlaw. New York: Applause Theatre, 1967. 317 - 374.
- (66) Bordman, Gerald Martin. *The Concise Oxford Companion to American Theatre*. New York: Oxford UP, 1987.82.
- (67) 久米邦武『日本外交文書』第5巻 日本国際博覧会 1904年 1枚○～1枚。
- (68) "Iwakura's Presents to Miss Santley." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 24 May 1872.
- (69) 木皿掛軸 前掲書 1枚○～1枚 1面。
- (70) 11原文『日本人登場』松柏社 1100八年。田永孝『海を渡る

た幕末の曲芸団】中央公論新社、一九九九年。

(71) 外務省編、前掲書、五六頁。倉田喜弘『海外公演事始』東京書籍株式会社、一九九四年、一一頁、九四頁。

(72) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 5 Jun. 1872.

(73) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 4 Jun. 1872.

(74) "Amusements." *Daily Morning Chronicle* [Washington] 5 Jun. 1872.

(75) 木口孝允、前掲書、一八二一頁。

(76) 久米邦武『久米博十九年回顧録・上』呑糸田大助出版会、一九三九年、第一卷、一一頁。

(77) Mayo, Martlene J. "The Western Education of Kume Kunitake, 1871-6." *Monumenta Nipponica* 28.1 (1973) : 26-73. 54.

(78) 呂玉美英『アメリカの「ハヤギ」(X)』中央公論社、一九九五年、一五七頁。

(79) 〔原文氏の〕教示によれば、「Bell of Japan」は早川源次郎一座の綱渡り芸人の一人、山本初太郎であった可能性が高。<sup>30</sup>

(80) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一卷、一六五頁。

(81) 木口孝允、前掲書、一八五頁。

(82) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一卷、一八五頁。

(83) 中村洪介「坂倉使節団と西洋音楽」「西洋の音、日本の耳」春秋社、一九八七年。奥中康人『國家と音楽』春秋社、一〇〇八年。

(84) "Amusements." *Boston Daily Globe* 19 Jun. 1872. 1.

(85) 〔原文〕トローマン・ヒルの譯文題「アーバン・トマス・カベ」[トーマス・カベ]

ト・タイムズ】第四聯、チャーチス通譯社、一〇〇九年、一一四~一二五頁。

(86) 松尾正人『木口孝允』吉川弘文館、一〇〇七年、一四八頁には正次郎とある。

(87) 木口孝允、前掲書、一一一頁。

(88) "Public Amusements." *Liverpool Mercury* 18 Sep. 1872.

(89) "The Japanese Embassy." *Liverpool Mercury* 2 Oct. 1872.

(90) 木口孝允、前掲書、一四二頁。

(91) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一卷、一三三頁。

(92) 木口孝允、前掲書、一四五頁。

(93) "Theatre Royal." *Manchester Guardian* 5 Oct. 1872.

(94) Knowles, James Sheridan. *The Love-Chase*. New York: Samuel French, c1842.

(95) 木口孝允、前掲書、一四一頁。

(96) Kennedy, Dennis ed. *The Oxford Encyclopedia of Theatre and Performance* Vol. I. Oxford UP, 2003, 68.

(97) 久米邦武『久米博十九年回顧録・上』呑糸田大助出版会、一九三九年、一一一頁。

(98) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』第一卷、一八〇頁。

(99) Glassstone, Victor. *Victorian and Edwardian Theatres: An Architectural and Social Survey*. London: Thames and Hudson, 1975. 32.

(100) *Ibid.* 42.

(101) Foulkes, Richard *Performing Shakespeare in the Age of Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 86-87.

(102) *Ibid.*, 96—100.

(103) Booth, Michael R. *Theatre in the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.50.

(104) *Ibid.*,49.

(105) Derbyshire, Alfred. *The Art of the Victorian Stage: Notes and Recollections 1839—1908*. New York: Blom, 1969. 44—

45.

(106) 由井壯臣『懐は昔の記——林董回想録』平凡社、一九七〇年、一八九頁。

(107) 『抜きの抜かれ』と、明治一一年の新富座で上演された『漂流奇譚西洋劇』との関連については、拙稿「明治初期の歌舞伎は西洋演劇と出合ったのか?」(『演劇学論叢』第七号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、一〇〇四年)で論じてみる。